『日本語学論集』第１２号　２０１６年３月

「ばかりに」の原因用法の成立について

馬　紹 華

０．　はじめに

副助詞「ばかり」は程度用法（「完成まで十日ばかり必要だ」）、限定用法（「酒ばかり飲む」）の他、動作の完了直後を表す用法（「今着いたばかりだ」）、完了に近い状態を表す用法（「後は、お客の到着を待つばかりだ」）、“今にも…しそう”という将然状態にある状況の説明を表す用法（「あふれんばかりの買物客」）など、多様な意味用法を持っている（森田 1980）。本稿の考察対象となる「ばかりに」は副助詞「ばかり」と格助詞「に」が結合した形であり、「予測を誤ったばかりに被害を拡大した」のように原因を表すことが広く認められている（以下、「原因用法」と呼ぶ）。

副助詞「ばかり」に関する先行研究では、古典語を扱うものでは、中心的用法として扱われる程度用法・限定用法の意味変化、及び接続による両者の弁別[1]に議論の焦点が当てられ（湯沢 1955、此島 1966、小林 1969、李 1992、小柳 2003、宮地 2003）、現代語を扱うものでは上で述べた多様な意味用法について記述することに重点が置かれている。これまで、「ばかり」の程度用法・限定用法の変遷過程は明らかになっているが、それらの周辺的用法に関する歴史的な考察はまだ不十分である。筆者は、これまでに原因・理由を表す複合接続表現に関する通時的考察を行ってきた（馬 2013、2014、2015）。本稿はその一環として「ばかりに」の原因用法の獲得や意味変化を考察することを目的とする。

１．　現代語「ばかりに」に関する先行研究の概観

「ばかりに」の原因用法に関する先行研究の方向性は大よそ次の二点にまとめられる。すなわち、一つは、副助詞「ばかり」の持つとりたての性質によって「ばかりに」の前件が後件の結果に対して唯一の原因になるという議論であり、もう一つは、「ばかりに」の後件でマイナスの評価を伴う事態が述べられ、「ばかりに」構文の全体が後悔、残念と

[1] 古典語「ばかり」は活用語に下接する時、終止形に接続した場合に程度、連体形に接続した場合に限定を表すと言われるが（湯沢幸吉郎 1955）、これには例外が多いことが後に指摘されている（小柳智一 1997）。

いった気持ちを伴うという議論である（国立国語研究所 1951、中里 1995、市川 2007、三浦 2009[2]）。これらの論旨と違って、前田（1997、2009）は、前件が唯一の原因であること、あるいは他に原因が暗示されるかが文脈からは特に示されることはないと指摘し、「ばかりに」の前件が「非実現が期待されていた最低条件」だと考えられるものと論じている。しかし、そのように「ばかりに」の前件を最低条件だと見なしてよいかについては疑問が残る[3]。本稿では従来の研究に従い、「ばかりに」の意味用法は「それだけが原因となって、後件の事態になった」という前後関係を表すものと考えたい。

また、「ばかりに」の後件に現れるマイナス性（マイナス結果、マイナス評価の事態）の内実は上記の先行研究では具体的に定義されていない。本稿で「ばかりに」の用例について考察して得た結論を先取りして述べると、「ばかりに」構文のマイナス性の内実は、（1）の用例が示すように、主体か主体の身内、あるいは第三者が何らかの被害に遭うというような、事態の望ましくない性質であると考えられる。

（1）a 僅かなお金を惜しんだばかりに、大きな損をした。
　　b 娘は足が悪いばかりに、学校でいじめられている。

その一方で、全ての「ばかりに」の構文にマイナス性が現れるとは限らないことが、中里（1995）、前田（2009）によって指摘されている。たとえば、「ばかりに」は「たい」に下接する時、（2a）のように後件事態からマイナス性を感じ取れる場合と、（2b）のようにマイナス性を感じ取れない場合の両方がありうる。

---

[2]国立国語研究所（1951）は、「ばかりに」の意味を「ただそれだけのことが原因となって」としている。中里（1995）は、「前件 A でなければ後件 B は起こり得なかったと話し手が判断している点、A は B の絶対的・唯一的原因理由となる」と述べ、「A と B の結び付きは話し手の主観に基づく」と指摘している。市川（2007）は、「〈ばかり〉が限定を表すことから、〈～ばかりに〉にも〈その原因・理由〉を限定するという意味合いが含まれ、話し手の〈それだけのために〉こうなったという強い批判・非難、後悔の気持ちが強く」と述べている。三浦（2009）は、「〈ばかりに〉の〈ばかり〉は、〈だけ〉と同じように〈限定〉を表し、他の出来事ではなく、前件事態が生じてしまったことに対する話し手のマイナス評価を表している」としている。

[3]前田（1997、2009）は、「英語が話せないばかりに、恥をかいた」という例文を挙げて、「英語さえ話せれば恥をかかない」という話者の判断が含まれると論じ、「A ばかりに B」は「その A（原因）さえ起こらなければ B（結果）は起こらない」という判断を話者が行うような事態であると述べている。さらに、「A（原因）さえおこらなければ」という場合の前件を、後件の非実現にとっての最低条件だと述べている。しかし、「ばかりに」の前件は必ずしも「最低条件」になるとは限らない。たとえば、

・二人は付き合っているのだが、親同士の仲が悪いばかりに、いまだに結婚できずにいる。

結婚できる条件としては、例えば「二人はお互いに好きである」、「貯蓄がある」、「親同士の仲が悪くない」など幾つかを想定できるが、「親同士の仲が悪くない」ことは諸条件の中で“最低”に位置づけられるとは限らない。「親同士の仲が悪くない」ことが結婚できることの最低条件でないとしても、他の条件がすべて満たされていながら「親同士の仲が悪くない」という条件だけが満たされない場合ならば、上例は成立する。従って、本稿ではやはり、「ばかりに」の前件は後件の結果に結びつく唯一の原因を表すものと考えることにしたい。

（2）a また、お年寄りの中には、自分に注目を引きたいばかりに、世話をしている人のことを、悪く言う人がいます。（BCCWJ 宮子あずさ「老親の看かた、私の老い方」）

b 恩師に会いたいばかりに、はるばる海を越えてやってきた。

さらに、マイナス性を感じ取れない（2b）の「ばかりに」の後件はただ出来事をありのままに述べるだけでなく、困難を乗り越えるという意味合いや、「しなくてもよいこと」を意図的に行うといったニュアンスを伴うことが多い。すなわち、後件には「はるばる」や「わざわざ」、「あえて」といった副詞が多用される。このような「ばかりに」の用例は次のようなものであり、少なからず得られる。

（3）a たくさんの旅行者たちが、ただ彼の欠けるところのない美しさとその顔貌を見たいばかりに、遠い遠い国々から、はるばるエジプトにやって来るありさまでありました。（BCCWJ 佐藤正彰「美食」）

b お客さんの中には、ここの水が飲みたいばかりにわざわざうちで給油なさる人がいるんですよ。（BCCWJ 鮎川哲也「マーキュリーの靴」）

c それにチップをもらいたいばかりに必要以上に動き廻る者もいた。（BCCWJ 渡辺淳一「遠き落日」）

このように、「ばかりに」は「たい」以外の活用語を受ける場合と「たい」を受ける場合とで、後件事態のマイナス性の有無が異なる。前者は必ず後件事態がマイナス結果となるが、後者はマイナス結果と非マイナス結果の両方が可能である。従って、上接語によって「ばかりに」構文に次のような下位区分を設ける必要があると考えられる。本稿では便宜上、「ばかりに」を「活用語+ばかりに」（第Ⅰ類）（以下、「活用語+ばかりに」と表記するものはすべて「たい」を除くものとする）と「たい+ばかりに」（第Ⅱ類）の二つに分けて考えることにする。

第Ⅰ類「活用語＋ばかりに」〔前件：現実の出来事〕

（4）彼のことを信じたばかりに、ひどい目にあった。　……（マイナス結果）

第Ⅱ類「たい＋ばかりに」〔前件：気持ちの現れ〕

（5）a 早く終わらせたいばかりに猛スピードで作業した。（中里 1995）

……（非マイナス結果）

b また、お年寄りの中には、自分に注目を引きたいばかりに、世話をしている人のことを、悪く言う人がいます。（BCCWJ 宮子あずさ「老親の看かた、私の

老い方」）　　……（マイナス結果）

上記の分類は、後件事態におけるマイナス性の有無によって分けたもので、「ばかりに」が持つ、唯一の原因を示すという意味用法は共通している。また、この二分類を行ったもう一つの理由として、それぞれの前件に対する解釈が異なることが挙げられる。つまり、第Ⅰ類の「活用語+ばかりに」の前件は後件事態に対する原因としか考えられないが、第Ⅱ類の「たい+ばかりに」の前件は原因としても目的としても理解することができる。たとえば（5a）であれば、「猛スピードで作業した理由は早く終わらせたいからだ」と解するならば、前件と後件の関係は「原因－結果」となるが、一方で、「早く終わらせるために猛スピードで作業した」と解するならば、後件は前件を実現するための手段となり、「目的－手段」という関係で捉えられる。（5b）も同様に考えることができる。「原因－結果」という関係で捉えるならば、「自分に注目を引きたい」ことが原因で、「世話をしている人の悪口を言う」ことが結果となる。「目的－手段」の関係で捉えるならば、「自分に注目を引くために、世話をしている人の悪口を言う」のである。このように、第Ⅱ類の「たいばかりに」において、前件と後件の関係は「原因－結果」と「目的－手段」の両方で捉えられることが分かる。

なぜ、第Ⅰ類の「用言+ばかりに」は前件が原因としてしか捉えられないのに対して、第Ⅱ類の「たい+ばかりに」は前件が原因としても目的としても捉えられるのか、そして、第Ⅰ類の「用言+ばかりに」の後件にはマイナス結果しか現れないのに対して、第Ⅱ類の「たい+ばかりに」の後件にはマイナス結果と非マイナス結果の両方が現れるのか、この一連の疑問を解くために、次節から「ばかりに」の原因用法の成立についての通時的な考察に入る。筆者の調査では、「ばかりに」の原因用法の出現は近世初期頃であるが、議論の進行上、まず２節で中古・中世の「ばかり」に少々触れる。その後、３節で近世の「ばかりに」が持つ原因用法について考察を行う。

２．　中古・中世の「ばかりに」について

２．１　中古の「ばかりに」

上代の「ばかり」については、此島（1966）、小林（1969）で、万葉集に見られる３０例の中で、「いかばかり」「しかばかり」「かくばかり」のように副詞に付くものが最も多く、「玉の緒ばかり」「七日ばかり」など数名詞に付くものがこれに次ぎ、用言に付くものは僅か２例であると指摘されている[4]。中古になると用言に付く「ばかり」の用例

[4]『万葉集』において、用言に付く「ばかり」の二例は次のものである。
・広瀬川袖漬くばかり（衝許）浅きをや心深めて我が思へるらむ（万葉集巻七・1381）
・我が命し長く欲しけく偽りをよくする人を捕ふばかりを（執許乎）（万葉集巻十二・2943）

が増加し、活用語の終止形を受ける「ばかり」は程度を表し、活用語の連体形を受ける「ばかり」は限定を表すことが広く知られている。中古の「ばかり」の限定用法について、小柳（2003）は、「のみ」と区別しながら、古代語のとりたてに「事物の限定」（第１種）と「事態の限定」（第２種）の二種類があることを論じている[5]。さらに、小柳氏は上代の「のみ」には第１種と第２種の両方があったが、その内第１種の用法が中古には衰えて第２種の用法だけが残され、かわりに「ばかり」が第１種の「事物の限定」を表すようになったと述べている。本稿との関わりでは、小柳（1997、2003）における、中古の「ばかり」には「ばかりに」の形で原因節を構成するものがある、という指摘が興味深い。小柳氏は、そうした用例として次のものを挙げている。

（6）いとどつつましければ、まめやかには思ほし絶えたるを、かたじけなきばかりに〔真木柱が匂宮に対して畏れ多いという気持ちから〕、忍びて、母君ぞ、たまさかにさかしらがり聞こえたまふ。（源氏・紅梅・56）

（7）今はただ亡きに思しゆるして、他人の言ひおとしめむをだに省き隠したまへとこそ思へ、とうち思ひしばかりに〔…と、恨めしく思ったことから〕、かくいみじき身のけはひなれば、かくところせきなり。（源氏・若菜下・237）

（8）〔八の宮〕心ばかりは蓮の上に思ひのぼり、濁りなき池にも住みぬべきを、いとかく幼き人々を見棄てんうしろめたさばかりになん〔ほんとに幼い人々を後に残していくのが気がかりで〕、えひたみちにかたちをも変へぬ。（源氏・橋姫・127）

（9）我も、故北の方には離れたてまつるべき人かは、仕うまつると言ひしばかりに〔女房としてお仕えする身であったというだけで〕数まへられたてまつらず、口惜しくてかく人には侮らるると思ふには、かく、しひて睦びきこゆるもあぢきなし。（源氏・東屋・42）

（10）いま来むといひしばかりに長月の有明けの月を待ちいでつるかな（古今和歌集・14・六九一）

（6）は真木柱が複雑の気持ちから娘の代わりに匂宮に返事を書く場面で、（7）は六条御息所が執念深い恨めしい気持ちから凄まじい有様になり果てた場面で、（8）は八の宮が姫君を後に残していくのが気がかりで、出家できないのである。この三文はいずれも、前件の示す主体の気持ちから後件の事態が導かれており、前件と後件の関係を一応

[5] 小柳（2003）は、「事物の限定」を表す「ばかり」は語に後接して前接語に関係し、語性の幅があること、また「事態の限定」を表す「ばかり」は成分に後接して節全体に関係し、文内成分としてほぼ副詞に相当することを述べている。小柳(2003)で挙げられている例は次のものである。

・直衣ばかりを取りて、（直衣だけを取って）（源氏物語・紅葉賀・1，p.341）

・いよいよ光をのみ添へたまふ御容貌など、（ますます光をお加えになる一方のお姿など）（源氏物語・行幸・3，p.297）

因果関係として認めることができるが、現代語のように出来事が原因となる「ばかりに」とは異なる。(9) は母君が女房として仕える身であったというだけで、宮から一人前に扱っていただけなかったと発話する場面であり、「ばかりに」の前件と後件は逆接関係と捉えるべきものである。(10) について、小柳 (2003) は「今来むと言ひし」という些細なことが原因となって「長月の有明の月を待ち出でつる」という深刻な結果が生じたことを言う」と述べている。しかし、「すぐに行こうとあなたが言っただけで/ぐらいで」のように、この「ばかり」の意味用法は程度を表すものであるとも十分考え得る。

以上、小柳 (1997、2003) で中古の「ばかり」が「ばかりに」の形で因果関係を表す接続助詞のような働きを持つもの[6]と指摘されていることを見たが、上述のように、中古では「ばかりに」という形であっても、現代語のように一語化して原因用法を獲得した形式になっているとは思われない。中古の「ばかりに」はやはり副助詞「ばかり」と格助詞「に」という別々の二語からなる表現と考えるべきである。

２．２　中世の「為ばかりに」

中世の「ばかり」については、此島 (1996) が「菜果ハカリ食テイラレタラ……(史記抄・十)」という例を挙げ、「ほかの物は食わず菜果だけ」のように解釈するならば古来の「ばかり」だとし、「いつもいつも菜果ばかり食う」のように解釈するならば平安朝の「のみ」に当る所に「ばかり」が進出した例になると指摘している。また宮地 (2003) は、中世において「ばかり」の限定用法の中に「事態の限定」が現れ、「事物の限定」と「事態の限定」の両方が併存した後、幕末になって「事物の限定」を表す「だけ」が生じ、「ばかり」の限定用法は次第に「事態の限定」に収斂したことを述べている。これらの指摘と前節の小柳 (2003) の所論とを合わせて考えると、「ばかり」は中古において「のみ」の「事物の限定」(第１種) 用法を侵し、中世において「のみ」の「事態の限定」(第２種) 用法を侵し、次第に「のみ」に取って代わっていったという変遷過程が想定される。

中世において「ばかりに」の形は、程度を示すもの (「直衣のそでもしぼるばかりに涙をながし (天草本平家物語・107)」)、対象を限定するもの (「我ガ氣ニ合ウ者バカリニ恩賞ヲ施イテ (天草本金句集・259)」)、「に」格を必要とする動詞の関係成分として現れるもの (「ただデウスの御計ひばかりに随ひ (コリャード懺悔録・22)」) があるが、その他に、「為」に下接して目的を限定するものが注目される。

---

[6] 小柳 (1997) では、源氏物語において限定を表す「ばかり」の用例の内、「ばかりに」の形で原因を表す接続助詞のような働きをするものは (6) ～ (9) の４例の他、同様に考えることができそうな「～と思ふばかりの」の形が３例あると述べている。この数は源氏物語の「ばかり」の９０８例の数 (同論文の統計による) と比べて極めて少ないことが分かる。

（11）本の誓文の題目でないところで、ついでに遂げいでも大事あるまいと存じて、ゼンチョの奉行をたばかる為ばかりに立てまらした。（コリャード懺悔録・61）
（12）身をおもふ大切をはなれざるがゆへに、大きなるのぞみをもてこひ奉る事も、ひとへにの御ほまれのためばかりと心ざす事なし。（こんてむつすむん地・365）
（13）分別の光を与へ給ふ事ハ道を知るため計りに非ず、只よく其を行ハせ給ハんが為成。（ぎやどぺかどる・上 65 オ 5）
（14）まう打つまいと約束したれども、その後二・三度打ちまらした。さりながら、一度は強いられて、慰みにばかり、金を儲けいでござった。（コリャード懺悔録・31）

（11）～（13）において、「ばかりに」の前に形式名詞「為」が現れ、「ばかりに」の上接句が目的の内容であることを示している。これらの例における「ばかり」の意味用法は、前接語句の表す目的内容が限定されたものであることを表すことだと考えられる。即ち、（10）は「（誓文は）ゼンチョ（異教徒）の奉行のためだけに（たてた）」、（12）は「（大きな望みを持って奉ることも）純粋に神の御栄光のためにのみと志すことがない」、（13）は「分別の光を与えることは道を知るためだけではない」ということである。（14）の「にばかり」の形では、「為」ではなく格助詞「に」が目的を示しており、「ばかり」はやはり前接語句の表す目的内容を限定している。つまり、博奕の目的は「慰みのためだけ」であるということを表している。このように、(11)～(13)の「ばかりに」の上接句はいずれも目的の内容を示しており、「ばかりに」はその目的を限定する働きを担っていると見られる。

３．　近世の「ばかりに」について

３．１　「ばかりに」の意味用法の変化―「目的」から「原因」へ

近世初期になると、中世末期と同じように目的を限定する「ばかりに」の用例が浮世草子や浄瑠璃から得られる。その用例は次のものである。

（15）季中に病つくりて御暇請けて、本郷六丁目の裏棚へ宿下りをして、露路口の柱に、「この奥に万物ぬひ仕立屋」と、張札をして、それ〔愛欲のためだけに〕ばかりに身を自由に持ちて、「いかなる男なりとも来るを幸」とおもひしに、（西鶴浮世草子・「好色一代女」・497・貞享 3 年（1686））
（16）この男は伴の市九郎とて津軽町人、一念に若色あさからぬすき人、この度の江戸心ざしも、堺町に近年の出来嶋、見ぬこざらしをこがれて、奴作兵衛がもと

へ、しるべの方より状を付けられて、若道ぐるひばかりにのぼる。（西鶴浮世草子・「男色大鑑」・366・貞享4年（1687））

（17）道を立ちて独り暮らせば、渇命（かつめい）に及び、身を墨染になす事も、一心よりおこらぬ出家も嫌なれば、世渡りの頼りばかりに、又奉公勤めける。（西鶴浮世草子・「武家義理物語」・454・貞享5年（1688））

（18）「さてはこの人、いつぞや仮初に申し交はせし言葉を違へず、今朝の一飯食ふばかりに、はる／〝＼の備前より京まで上られけるよ」と、昔は武士の実ある心底を感ぜられし。（西鶴浮世草子・「武家義理物語」・378・貞享5年（1688））

（19）またはじめより偽りの勤めばかりに逢ふ人も、絶えず重ぬる色衣、つひの寄るべとなる時は、はじめの嘘もみな誠。（近松浄瑠璃・「冥途の飛脚」・126・正徳元年（1711））

これらの用例は次のように解釈され、「ばかりに」の前件がいずれも目的を表す内容であることが窺える。（15）は「愛欲のためだけに、身を勝手のままにする」、（16）は「男色ぐるいのためだけに江戸へのぼる」[7]、（17）は「生活のためだけに妾奉公に勤める」、（18）は「一飯を食うためだけに備前より上京した」、（19）は「初めは本心からではなく遊女という身の勤めのためだけに人と逢う（男女の逢瀬を指す）」である。このように、これらの例における「ばかりに」の前件はすべて目的であり、後件はその目的を実現するための行動（手段）となっている。

また、近世時代に初めて「ばかりに」の上接語に名詞や動詞の他に、（20）～（24）のように、「たい」や「う／よう」の意志表現が現れてくる。そして、こういった「たい+ばかりに」「う/よう+ばかりに」の前件が目的にも原因にも捉えられることは、「ばかりに」の構文において大きな変化の結果である。

（20）その言葉を覚えてか、それから尋ぬる折もなく、今で胸にたまつてゐて、穿鑿（せんさく）せうばつかりに、今日ははる／〝＼来ました。（近松浄瑠璃・「卯月の潤色」・143・宝永3年（1706））

（21）ま一度髪のある顔を、おつやに見せたいばつかりに、惜しからぬ頭の雪解くも、撫でるも、子のかはいさ、早う連れて帰つてたも、伝内様頼みますと、家来の我らに様つけて、待ち焦るゝ親心。（近松浄瑠璃・「心中刃は氷の朔日」・272・

---

[7]「若道狂」という表現は西鶴の浮世草子において2例ある。（16）の他の一例は次のものである。
・若道狂ひの焼けとまらぬ者〔役者狂いのやめられない者〕の申し出して、この若衆を墓原といへるは、一夜の情代銀三枚あげし替へ言葉なり。（西鶴浮世草子・「男色大鑑」・493）
この例から、「若道狂ひ」は「若道狂いが好きな人」という性質を表すのではなく、「若道狂いをする」という行為を指すことが分かる。従って、（16）の「ばかりに」の前件は目的を表すものとして解するのが妥当だろう（「男色ぐるいのために江戸へのぼる」）。

宝永 6 年（1709））

（22）親仁が気をまはさうかしらねど、あなたのお盃がいただきたいばつかりに、明日長崎へおたちなさるゝお客をすてて参りました。（浮世草子・「野白内証鑑」・157・宝永 7 年（1710））

（23）こな様のそれを聞かふばかりに、先程から積もるやうな事をわざと申ましたが、手褒めながらわしも目高じゃ。（浮世草子・「傾城禁短気」・320・正徳元年（1711））

たとえば、（20）の「穿鑿せうばつかりに」は、「（その言葉の真偽を）穿鑿するために、（今日ははるばる来た）」のように目的に捉えられる一方で、「（その言葉の真偽を）穿鑿しようと思うから、（今日ははるばる来た）」のように原因にも捉えられる。（21）～（23）も同様に考えることができる。既述のように、現代語の「たい+ばかりに」の前件は原因としても目的としても捉えられる（1 節を参照）。なぜ「たい」や「う/よう」といった願望を表す意志表現が付くと、「ばかりに」の前件は目的でも原因でも理解できるのかを考えると、そもそも願望とは、行動する前に持つものである。ある願望内容を目的として行動することは、その願望の存在を理由として行動することと殆ど意味的には同じであると思われる。

このように、「たい」や「う/よう」といった意志表現が前件に現れるようになったことにより、「ばかりに」の前件内容は目的としても原因としても捉えることができるようになり、「ばかりに」の意味用法が「目的」を表すことから「原因」を表すことへと変化する契機になったものと考えられる。「たい（う/よう）+ばかりに」の影響が更に広がり、時代が下って「用言+ばかりに」の場合にも前件の意味用法が「原因」のみとなった段階で、「ばかりに」は原因用法を完全に獲得したと見られる。そのような用例は次のように浄瑠璃や歌舞伎、近世後期の噺本において観察される。

（24）その時こなたの夫加古川本蔵、その座にあつて抱き留め、殿を支へたばつかりに、御本望も遂げられず、敵はやう／＼薄手ばかり、殿はやみ／＼御切腹、口へこそ出したまはぬ、その時の御無念は、本蔵殿に憎しみがかゝるまいか。（浄瑠璃・「仮名手本忠臣蔵」・123・寛延元年（1748））

（25）お前様や久松を殺しとむない〔殺したくない〕ばっかりに、蝶よ花よと楽しんだ一人娘を尼にして。（浄瑠璃・「新版歌祭文」・150・安永 9 年（1780））

（26）某も元は小野ゝ隨身、競〔「競」は底本「鏡」〕馬・角力に名虎を投げたるばっかりに、今惟仁のお直なれども、元はお手前と同傍輩。（歌舞伎・「名歌徳三舛玉垣」・131・享和元年（1801））

（27）わたしもそのはなしがあつたから、ちょつとこつちをはづしていつて見やうとおもつても、れいのふさがきていたはつかりに、見そくなつたか、くやしいね。

（噺本・「おとぎばなし」・163・文政 5 年（1822））

（24）は「（本蔵が）殿を支えたので、殿は本望を遂げられず、むざむざと切腹した」、（25）は「お前様と久松を殺したくないので、一人娘を尼にした」、（26）は「元は小野の付け人だった人が、（百斤の鼎を上る紀の）名虎を投げ飛ばしたので、今は惟仁のそばで直接に仕えるようになった」、（27）は「れいのふさがきていたので、〔きんさんを〕見る機会を逃した」[8]ということである。このように、「ばかりに」はいずれも目的ではなく原因を表すことが分かる。

この時期までの用例の観察を通して、現代語「ばかりに」の原因用法の発生が、目的を表す用法からの変遷に求められることが明らかになった。つまり、古典語「ばかりに」はもともと上接語句の表す目的を限定する意味用法を持っていたが、「たい+ばかりに」といった願望表現の出現により、目的と原因の両方を表すようになり、さらに「たい+ばかりに」の勢力が拡大すると、「用言+ばかりに」の場合でも前件内容が後件内容の原因としてしか解せないものとなり、現代語に繋がる「ばかりに」の原因用法が成立したと見られる。

３．２　「ばかりに」の構文特徴―マイナス性の発生

前節では、現代語「ばかりに」の原因用法の成立が、もともとは目的を表す用法から転じたところにあることを論じた。本項では、現代語「ばかりに」の後件にマイナス性の事態が現れるという構文特徴の発生について考察する。結論を先取りするならば、後件がマイナス性を持つという構文特徴は、「ばかり」の限定用法の意味特徴と大きく関わっていると考えられる。

古代語における限定表現については、「ばかり」が、中古において「のみ」の持つ「事物の限定」用法を侵し、中世において「のみ」の「事態の限定」用法を侵したが、近世末期に至って「だけ」が「事物の限定」用法を獲得し「ばかり」に取って代ったことが小柳（2003）、宮地（2003）によって論じられている。特に、宮地（2003）では、中世から近世末期まで「ばかり」は「事物の限定」と「事態の限定」が併存していると指摘している。

現代語の限定表現については、丹羽（1992）が、「だけ」の限定用法は「他の事態を排除する」ことに重点があり、「ばかり」の限定用法は「成立するのは当該事態で尽くされる」ことに重点があると指摘している。その上で、「だけ」の限定は「外限定」であり、

[8] 前後の文脈から「れいのふさ」が具体的に何を指しているのかは確認できなかったが、しかし、それが原因で後件の事態（久しぶりに帰ってくるきんさんを見ること）が実現できなかったことを判断できる。

「ばかり」の限定は「内限定」だと論じている。今少し「ばかり」の「内限定」の性質について詳細に見ると、丹羽（1992）によれば「成立するのは当該事態で尽くされる」という「内限定」の定義は、“空間がそれに尽くされる場合”と“感情・感覚がそれに尽くされる場合”がある。たとえば、「漢字ばかりで書いてある」の場合は、“その空間（文章）が漢字で満たされている”ことを意味し、「その時のことは、もう恐ろしいばかりで、あまり覚えていない」の場合は、“話者の心の中が恐ろしい気持ちでいっぱいに充満している”ことを意味するとされる。また、現代語の「だけ」と「ばかり」の違いについて、説明のあり方に異なる点があるものの、同様の趣旨と捉えられる研究として菊地（1983）がある。菊地（1983）では、「だけ」の限定用法については「そうでないものと対比において、そうであるものダケを取り出して」と説明され、「ばかり」の限定用法については「そうであるものバカリに次々に注目して、同類として括れる事態が数多くみとめられる時に使われる」と説明されている。

丹羽（1992）で指摘した「内限定」の意味特徴は近世「ばかりに」の用例からも窺えることができる。たとえば、前掲（20）～（23）の用例において、上接語は「た」や「う/よう」の気持ちの現れを示す表現であり、「ばかりに」が持つ限定の意味特徴は「内限定」だと見なされやすい。即ち、「たい」や「う/よう」で示す気持ちそのものが“当該事態”として主体の心に尽くされる（充満する）ということである。また、主体の心において気持ちが横溢するに従って、その気持ちが向かうところの目的を実現したいという願望が強くなるため、後件ではその願望を実現するために全力を尽くすという意味合いの内容が現れやすくなる。たとえば、以下の再掲の用例について、

（21）ま一度髪のある顔を、おつやに見せたいばつかりに、惜しからぬ頭の雪解くも、撫でるも、子のかはいさ、早う連れて帰つてたも、伝内様頼みますと、家来の我らに様つけて、待ち焦るゝ親心。（近松浄瑠璃・「心中刃は氷の朔日」・272・宝永 6 年（1709））（再掲）

（22）親仁が気をまはさうかしらねど、あなたのお盃がいただきたいばつかりに、明日長崎へおたちなさるゝお客をすてて参りました。（浮世草子・「野白内証鑑」・157・宝永 7 年（1710））（再掲）

（21）では、娘に（出家前の）顔をどうしてももう一度見せたいという願望から、主体は家来に“様”を付けることまでして娘を連れて帰ってくれるように頼んでいる。（21）では、盃をいただきたいという気持ちから、主体は大事なお客様を放って参上している。このように、（20）～（23）において、「ばかりに」の構成要素「ばかり」は「内限定」の意味特徴を持つからこそ、後件では「はるばる」や「わざと」といった語が生起しやすく、あるいは上例のように、日常一般の出来事と異なり困難を乗り越え力を尽くすと

いうニュアンスを伴う事柄が述べられるのである。

「ばかり」が「内限定」を示し、後件が前件の目的を実現するために力を尽くすという内容となる構文特徴は、次のように「ばかり」を含む形式（「ばかりに」、「ばかりで」）の用例から観察される。

（28）世の外聞ばかりに、送りむかひの駕籠（のりもの）、一門縁者の奢りくらべ、無用の物入りかさなりて、程なく穴のあく屋根をも葺かず、家の破滅とはなれり。（西鶴浮世草子・日本永代蔵・44・貞享 5 年（1688））

（29）京三条烏丸美濃屋の作右衛門、お梅を欲しいばつかりで、年々の残銀九貫五百目、百六十両で帳消して、この秋の買入れに、紅の花のやうな小判二百五十両、先へ預けて置かれた。（近松浄瑠璃・心中万年草・217・宝永 7 年（1710））

（30）是は内の掛の寄り輿兵衛めに遣りたいばかり、わしが五百盗んだ。（近松浄瑠璃・女殺油地獄・416・享保 6 年（1721））

（31）かの爪黒（つまぐろ）といふ牝鹿（めじか）は千疋が中に一疋、それ取りたいばつかりで、このやうに骨を折る。（浄瑠璃集・妹背山婦女庭訓・350・明和 8 年（1771））

（32）かの人に逢ふばかり寒い時分の野崎参り。（浄瑠璃集・「新版歌祭文」・140・安永 9 年（1780））

（33）お前様や久松を殺しとむないばっかりに、蝶よ花よと楽しんだ一人娘を尼にして。（浄瑠璃集・「新版歌祭文」・150・安永 9 年（1780））

これらの用例において、前件を実現するために「骨を折る」や「寒い時分の野崎参り」といった力を尽くすことを表す内容が後件に現れるものがある一方で、前件を実現したい気持ちが強すぎて、後件では実現するための手段を選ばず、その結果事態が望ましくない方向へ転じてしまうことを表すものもある。たとえば、（28）は、前件の「世の外聞」のために、つまり見栄を張るために、本来穴があきそうな屋根を葺かず、役に立たない費用ばかり使って、結局家が滅びてしまったという内容が後件に現れている。このよう
にマイナス性を帯びる事態が述べられているのは、前件の「世の外聞」のためという気持ちが強いことによると考えらえる。（30）の後件の「わしが五百盗んだ」ことはマイナス性を含む事態と言えるが、これも前件の「輿兵衛めに遣りたい」という気持ちが非常に強かったことによると考えられるであろう。

これで、現代語「ばかりに」のマイナス性という構文特徴の由来に説明が付くと思われる。つまり、近世語「ばかり」は「外限定」と「内限定」の両方の意味特徴を備えており、特に「内限定」の意味特徴は、上接語「たい」、「う/よう」の表現効果と相俟って、その結果前件を実現したい気持ちが主体の心に尽くされ、それに連動して後件では前件

を実現するために力を尽くすという内容の事柄が現れる。一方で、目的を実現しようという執着心が強すぎると、後件では非常識な手段を取ったり、あるいは望ましくない結果を招いたりすることもありうる。そして近世語では、後件事態が、望ましいことであれ、望ましくないことであれ、前件を実現するために全力を尽くすことであるという点が、「内限定」の「ばかり」を含む構文に共通する特徴だと見られる。

以上、近世語「ばかりに」の原因用法の成立及びマイナス性の構文特徴について考察してきた。調査資料から「ばかりに」の用例が３６例しか見つからなかったが、しかし、次の表１から「ばかりに」の意味用法が目的を表すことから原因を表すように変化してきたことを大まかに窺えるだろう。

作品名	成立年代	活用語+ばかりに（目的）	たい+ばかりに（目的・原因）	活用語+ばかりに（原因）
好色一代男	1682	1		
好色一代女	1686	1		
男色大鑑	1687	1		
武家義理物語	1688	2		
日本永代蔵	1688	1		
世間胸算用	1692	1		
野白内証鑑	1710		1	
心中万年草	1710		2	
傾城禁短気	1711		1	
卯月の潤色	1706		1	
心中刃は氷の朔日	1709		1	
心中万年草	1710		1	
冥途の飛脚	1711	1		
今宮の心中	1711			1
生玉心中	1715			1
女殺油地獄	1721		1	1
夏祭浪花鑑	1745			1
仮名手本忠臣蔵	1748			2
双蝶蝶曲輪日記	1749		1	
幼稚子敵討	1753		1	
妹背山婦女庭訓	1771		1	1
出類題	1773	1		
碁太平記白石噺	1780		1	
新版歌祭文	1780		2	1
太郎花	1789	1		
名歌徳三舛玉垣	1801		1	1
東海道中膝栗毛	1802-1822		1	
おとぎばなし	1822			1

*「活用語+ばかりに」（目的）は一部の体言を含む。

表１．近世語「ばかりに」の目的用法から原因用法へ

４．　近代の「ばかりに」について

近世と比べ、近代語「ばかりに」[9]用例は多く観察され、９５例も収集できた。３節の考察を通して、近世語「ばかりに」の原因用法とマイナス性の構文特徴の発生の経緯が明らかになり、現代語「ばかりに」の意味用法に近づいてきたことが分かる。しかし、近世の「ばかりに」は後件事態が主体の能動的な行動となる点で、現代語の「娘は足が悪いばかりに、学校でいじめられている」のような「ばかりに」の構文と異なっている。そのため、本節では近世に続き近代における「ばかりに」の構文特徴について考察する。

結論から先に述べると、近世から近代にかけて起きた「ばかりに」の構文特徴の変化は次の二点である。第一に、近代語「ばかりに」の後件では困難を乗り越え全力を尽くすというニュアンスが弱まる。第二に、近代語「ばかりに」の後件は主体の能動的な行動を表す例が減少し、前件の原因から導かれた望ましくない結果を表す例が増える（特に「活用語+ばかりに」の場合）。

まず、一点目の変化について。「たい+ばかりに」の場合には、そもそも前件が願望を表すため、後件では全力を尽くす内容が現れやすいと思われる。しかし、次の用例が示すように、「たい+ばかりに」の後件では特に力を尽くすようなニュアンスが感じ取れない。

（34）唯一言「帰りに寄る」と葉村に言いたいばかりに、こう人も怪しむ程屡電話に足を運ぶのであるが、いつも折悪くそれが塞がっている。（二葉亭四迷・「其面影」・1890）

（35）僕自身すら餘りに芝居染めて居るのに驚く。高が田舎藝妓で煩悶して、その優しい涙を見たいばかりに、―それも自分とは何んの結び付きも無い―学校を棄て、目的を捨て、なけなしの財産まで棄てゝ了ふとは餘りに馬鹿げて居る。（雑誌『太陽』・「壁の花」・1909）

（36）しかも余はただこの咄嗟の表情が見たいばかりに、すべての画面を組み立てていたのである。（夏目漱石・「思い出す事など」・1910）

（37）聞いてもいやな感じのする牢屋、お松はそれを見たいばかりに、わざわざこの絵図をそっと持ち帰ったのであります。（中里介山・「大菩薩峠」・1913）

（38）お父さん。不孝の罪は堪忍して下さい。わたしは二年以前の雪の夜、堪当の御

[9]本稿では、飛田（2007）に従って、明治元年～昭和２０年の日本語を近代語と呼ぶことにする。近代語の調査資料としては、『太陽コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』、『国民之友コーパス』、『青空文庫』（以上、国立国語研究所によるデータベースを利用）、『明治の文豪』、『大正の文豪』を用いた。

詫びがしたいばかりに、そっと家へ忍んで行きました。（芥川龍之介・「奉教人」・1918）

（39）二年前の夏、ただ彼女をよく見たいばかりに、わざと私の二三歩先に彼女を歩かせながら森の中などを散歩した頃のさまざまな小さな思い出が、心臓をしめつけられる位に、私の裡に一ぱいに溢れて来た。（堀辰雄・「風立ちぬ」・1936）

このように、近代語「たい+ばかりに」は（34）（35）のように後件で力を尽くして行う事柄が現れる用例がまだ一部観察されるが、多くは（36）～（39）のように後件で「わざわざ」、「敢えて」、「わざと」といった副詞が現れる例となっており、現代語「たい+ばかりに」の用法に近づいている。このような変化が起きた理由を考えると、「ばかりに」は原因用法の成熟に伴って一語化したものとしての認識が高まり、原因用法が成立した近世と比べ、構成要素の独自の意味特徴が希薄化した可能性がある。つまり、近代語「ばかりに」においては「内限定」の意味特徴が希薄化し、それに伴って、近世に比べ前件を実現したいという気持ちの強さも減じ、その結果後件では前件を実現するために力を尽くすというニュアンスが弱まったのであろう。

次は、二点目の変化について。近世語では、「たい+ばかりに」の場合でも、「活用語（一部体言を含む）+ばかりに」の場合でも、後件は主体の能動的な行動である（（15）～（33）を参照）。しかし、近代語における「活用語＋ばかりに」の用例は、後件では前件の原因から導かれた結果となる出来事を述べる場合が多い。なお、「たいばかりに」の場合は前件が願望を表し、後件では願望を実現するために能動的な行動を取ることを表す例が最も多いため、そのような変化は見て取りにくい。二点目の変化が起きた用例を幾つか挙げる。

（40）「宮、おのれ、おのれ姦婦、やい！貴様のな、心変をしたばかりに間貫一の男一匹はな、失望の極発狂して、大事の一生を誤つて了ふのだ。（尾崎紅葉・「金色夜叉」・1897）

（41）「はい、わたしが歌をうたわなければ、あの方は死ぬのではありませんでした、わたしが歌をうたったばかりに、それを聞いて死ぬ気になったのでございます、それですから、わたしが手を下して殺したのも同じことでございます」（中里介山・「大菩薩峠」・1913）

（42）あの実方の中将は、この神の前を通られる時、下馬も拝もされなかったばかりに、とうとう蹴殺されておしまいなすった。（芥川龍之介・「羅生門」・1915）

（43）親達の思慮が足らないばかりに、子供達まで好い迷惑をすると思ふと、彼は自分を責ずにはいられなかった。（雑誌『太陽』・「歌さんの幻影」・1917）

（44）眼の玉がなまじか頭から三三寸下についてゐるばかりに、鐵砲を狙つても大事

な頭は丸出しである。（雑誌『太陽』・「戦場の悪戯者―空想の兵器―運命の弾丸―」・1925）

二点目の変化が起きた理由は、「ばかりに」が目的用法から原因用法へ転じてきたことにあると考えられる。つまり、目的を表すなら、後件では目的を実現するための能動的行動は現れるのが自然で、原因を表すなら、後件では原因から導かれた結果の出来事が来ることは合理的である。近世から近代にかけて、「ばかりに」は目的用法から原因用法へ変化し、後件事態もそれに伴って上記のような変化が起きたのであろう。さらに、近世にすでに形成されていたマイナス性と相俟って、「ばかりに」の構文において前件の原因が後件のマイナス（望ましくない）結果をもたらすという構文特徴が一層定着したのであろう。

５．　終わりに

本稿では、近世から近代にかけて、「ばかりに」の原因用法の意味形成と変化について考察してきた。考察の結果はおよそ次の三点にまとめられる。

（一）「ばかりに」の原因用法の成立について。

「ばかりに」の原因用法はもともと近世頃に目的用法から転じたものであることが明らかになった。中世末期には「為ばかりに」の形で前件が目的であることを示していたが、近世に入ると、「為」が脱落し、「ばかりに」の形で前件と後件の関係が「目的－手段」であることを表すようになった。

また、近世では「ばかりに」の上接語に初めて「たい」や「う/よう」といった願望を表す意志表現が多数現れるようになる。上述したように、ある願望の内容を目的にして行動することと、ある願望の存在を理由にして行動することは殆ど同じ意味で捉えられる。従って、「目的－手段」の関係は「原因－結果」の関係に類似するものである。こういった意志表現の現れと相俟って、「ばかりに」の意味用法は目的を表すところから原因を表すところへ移行し、さらに「たい+ばかりに」の影響が拡大すると、「活用語+ばかりに」の場合でも前件は原因としてしか理解できなくなる。ここに至って、「ばかりに」の原因用法が成立したと考えられる。

（二）マイナス性の構文特徴の成立について。

丹羽（1992）では、現代語のとりたてについて、「だけ」は他の事態を排除するという「外限定」に重点があり、「ばかり」は「成立するのは当該事態で尽くされる」という「内限定」に重点があるとされている。「内限定」のあり方の一つとして、前件を実現したい気持ちが主体の心に尽くされ充満することがある。この場合、後件では苦労を惜しまず困難を乗り越え力を尽くすという事態が現れることとなる。反面、前件をどう

しても実現したい気持ちが強すぎると、後件では逆に事態が望ましくない方向へ転じてしまうこともありうる。たとえば、「おじいちゃんやおばあちゃんは、わたしに見てもらいたいばっかりに、痛いからだを動かそうとするの。」（重兼芳子「やまあいの煙」）実際、近世ではこのような用例がすでに観察される。このニュアンスが定着した結果、現代語「ばかりに」（一部「たい+ばかりに」を除く）はマイナス性の因果関係にしか用いられなくなったと考えられる。

（三）近代語「ばかりに」の構文変化

近世から近代にかけて、「ばかりに」の原因用法の成熟につれて、「ばかりに」は一まとまりの一語としての認識が高まり、構成要素「ばかり」の意味特徴（「内限定」）が感じられなくなる。近代語「ばかりに」の後件では近世のように全力を尽くすというニュアンスを伴わなくなってゆき、「活用語+ばかりに」の場合は後件に主体の能動的な行動ではなく、原因から導かれた望ましくない結果（出来事）が現れる。「たい+ばかりに」の場合における後件は、能動的な行動を表すが、「わざわざ」、「あえて」などの副詞が共起し、「しなくてもよい」ことを意図的に行うことを表す点で、現代語「たい+ばかりに」のニュアンスに近づいている。

〔調査資料〕

万葉集・源氏物語・古今和歌集の用例の引用は『新編日本古典文学全集』に拠る。《中世》〔キリシタン資料〕江口正弘（1986）『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院・大塚光信（1985）『コリャードさんげろく私注』明文堂・『文禄二年耶蘇會板　伊曾保物語』京都大学国文学会・新村出、柊源一（1957）「こんてむつすむん地」『吉利支丹文学集上』朝日新聞社・小島幸枝（1971）『どちりなきりしたん総索引』風間書房・豊島正之（1987）『キリシタン版　ぎやどぺかどる本文・索引第１冊』清文堂・金田弘（1969）『天草版金句集本文及索引』白帝社・〔狂言〕池田廣司、北原保雄（1972-1983）『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社・〔抄物〕坂詰力治（1987）『論語抄の国語学的研究』武蔵野書院・来田隆（1997）『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂・大塚光信他（1959）『六物図抄並解説・索引』・福島邦道（1983）『中華若木詩抄』笠間書院・来田隆（2008）『中興禅林風月集抄総索引』清文堂・鈴木博（1972）『周易抄の国語学的研究』清文堂。《近世前期》〔噺本〕『日本古典文学大系江戸笑話集』・岩淵匡他（1982）『醒睡笑静嘉堂文庫蔵本文編』笠間書院・〔浮世草子〕『日本古典文学大系浮世草子集』・浮世草子（井原西鶴）『新編日本古典文学全集』・〔浄瑠璃〕（近松門左衛門）『新編日本古典文学全集』及び『近世文学総索引』所収資料全て・『日本古典文学大系浄瑠璃集（上、下）』所収作品〔歌舞伎狂言〕坂梨隆三他編（2000）『好色伝受本文・総索引・研究』笠間書院・心中鬼門角『歌舞伎台帳集成１』・おしゆん伝兵衛十七年忌『上方歌舞伎集』（新日本古典文学大系）。《近世後期》〔歌舞伎〕『日本古典文学大系歌舞伎十八番集』『日本古典文学大系歌舞伎脚本集』・〔黄表紙〕『日本古典文学大系黄表紙洒落本集』所収作品・〔滑稽本〕東海道中膝栗毛・浮世風呂『日本古典文学大系』酩酊気質・浮世床『新編日本古典文学全集』異国奇談和荘兵衛・浮世くらべ・当世社選商『滑稽本集（一）』国書刊行会・穴さがし心の内そ

と『近代語研究 4』・〔人情本〕春色梅児誉美・春色辰巳園『日本古典文学大系』・仮名文章娘節用・恋の若竹・花の志満台・春色江戸紫・春色恋廼染分解・花暦封じ文「人情本」パッケージ」（国立国語研究所）・〔洒落本〕『日本古典文学大系黄表紙洒落本集』所収作品・〈後期上方語〉異本廓中奇譚・風流裸人形・短華藥葉・北華通情・すいのすじ書・うかれ草子・阿蘭陀鏡・十界和尚話・ふしみた・一文塊・竊潜妻・箱まくら・色深狭睡夢・北川蜆殻〈後期江戸語〉廓中奇譚・郭中掃除雑編・粋町甲閨・娼註銚子戯語・田舎芝居・部屋三味線・繁千話・仮根草・取組手鑑・松登妓話・恵比良濃梅・起承転合・部頭部屋・通客一盃記言『洒落本大成』。《近代》西洋道中膝栗毛・安愚楽鍋・胡瓜遣『明治開化期文学集（一）』筑摩書房・『太陽コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』、『国民之友コーパス』『青空文庫』（国立国語研究所）・『CD-ROM 版 新潮文庫 明治の文豪』・『CD-ROM 版 新潮文庫 大正の文豪』。《現代》ＢＣＣＷＪ（日本語書き言葉均衡コーパス）は、国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション『中納言』により用例を得た。

※日本古典文学大系の用例検索には国文学研究資料館「大系本文データベース」、新編日本古典文学全集の用例検索には国立国語研究所「日本語歴史コーパス」を利用した。

〔参考文献〕

市川保子（2007）『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク

菊地康人（1983）「バカリ・ダケ」、国広哲弥編『意味分析』東京大学文学部言語学研究室，pp.57-59

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞』秀英出版

此島正年（1966）『国語助詞の研究―助詞史の素描―』桜楓社

小林芳規（1969）「ばかり・のみ〈古典語〉」、松村明（編）『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社，pp.496-513

小柳智一（1997）「中古のバカリについて―限定・程度・概数量―」『国語と国文学』7，pp.43-57

小柳智一（2003）「限定のとりたての歴史的変化―中古以前―」、沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて―現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版，pp.159-177

蔡　薫婕（2013）「「だけに」と「ばかりに」にみられる「限定」と「原因理由」の関わり」『言語科学論集』17，pp.13-21

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味　第Ⅲ巻』くろしお出版

飛田良文（2007）「近代語」・「現代語」『日本語学研究事典』明治書院

中里理子（1995）「「だけに」「ばかりに」の接続助詞的用法について」『言語文化と日本語教育』9, pp.87-98

丹羽哲也（1992）「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44，pp.93-128

前田直子（1997）「原因・理由を表す『ばかりに』と『からこそ』」『東京大学留学生センター紀要』7，pp.25-41

前田直子（2009）『日本語の複文・条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版

馬　紹華（2013）「『以上』と『からには』の相違に関する考察」『日本語学論集』9，pp.54(189)-69(174)

馬　紹華（2014）「古代語『ものゆゑ』と『ものから』の意味変化について」『日本語学論集』10，

pp.106(131)-126(111)
馬　紹華（2015）「万葉集『ゆゑ（に）』の用法について」『日本語学論集』11，pp.106(151)-119(138)
三浦佑子（2009）「評価を表す接続助詞―「だけあって」と「ばかりに」―」『言語科学論集』13, pp.111-121
宮地朝子（2003）「限定のとりたての歴史的変化―中世以後―」、沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて―現代語と歴史的変化・地理的変異―』くろしお出版，pp.179-202
森田良行（1980）『基礎日本語２』角川書店
湯沢幸吉郎（1955）「「ばかり」の、活用語への付き方」『解釈』1－2
李　妙熙（1992）「中世における副助詞「ばかり」について―意味変遷を中心として―」『文芸研究』129，pp.62-74

（ま　しょうか　大学院人文社会系研究科　博士課程３年）